

漁業再興へサケ放流

●●● 人工ふ化場長

明日への一歩

19

山田町織笠の三陸やまた漁協ふ化場の橋場明彦場長(54)は東日本大震災当日の3月11日、盛岡市で水産関係の会議に出席していた。体験したことのない強い揺れに、「家族のことが心配で気になった」が、足が向いたのは野田村の自宅ではなく、単身赴任先の山田町の織笠川さけ人工ふ化場だった。

迫られる決断

昨年9月からの採卵・受精を経てサケの稚魚は順調に成育し、今春は1770万匹を放流する予定だった。既に800万匹は放し、場内の270万匹と湾内で海中飼育していた700万匹が残っていた。

場内の稚魚は水面を飛びはねることはなく、池の底付近に集まった。停電に伴い池に水を送り込んでいた自家発電



国、県の全面的援助必要

県さけ・ます増殖協会 山崎誠専務理事(72)



本県の定置網漁の水揚げの9割はサケが占める。サケを捕らないと岩手の漁業は成り立たない。イカやサバなどの夏漁は見送らざるを得なくても、秋サケに間に合わせたいと、多くの漁協が定置網の再開を目指している。県内の27河川のサケふ化場のうち織笠川や小本川などの9施設を除き、津波で大きな被害を受けた。自力では復旧できない施設もある。サケは放流しなければ現在の資源の水準は維持できない。資源を途絶えさせないために、国や県から全面的な援助がほしい。

採卵から稚魚に育てるまでには50〜60日かかる。施設の能力にもよるが、当面は織笠川などのふ化場などを活用して2回育てることも含め、全域をフォローする態勢を構築したい。

「必ず戻る」強く信じ

の軽油が減り、底を突きそうになっていた。「いつ放流するか」ぎりぎりの決断が迫られる中、黒い水がなくなり、流れが落ち着いた翌日の昼ごろ、「特別な思いで送り出した。海中飼育のいけすの残骸は、がれきの中から見つかった。網は破れていた。「稚魚は海に逃げたにちがいない」と信じている。

サケは本県の漁獲高の20〜30%を占め、単一魚種としてはトップ。2010年度は不漁だったとはいえ、漁獲高は75億4800万円に上った。本県漁業にとって、切っても

切れない魚だ。

「サケなくして本県漁業の再興はない。今年も9月には戻ってくる。捕獲態勢を早く築かなければ」と、施設の配管やポンプなどの点検に追われる。「地震によって井戸の水脈が変わった可能性もある」。確認しなければならぬことは、いくつもある。

決意の丸刈り

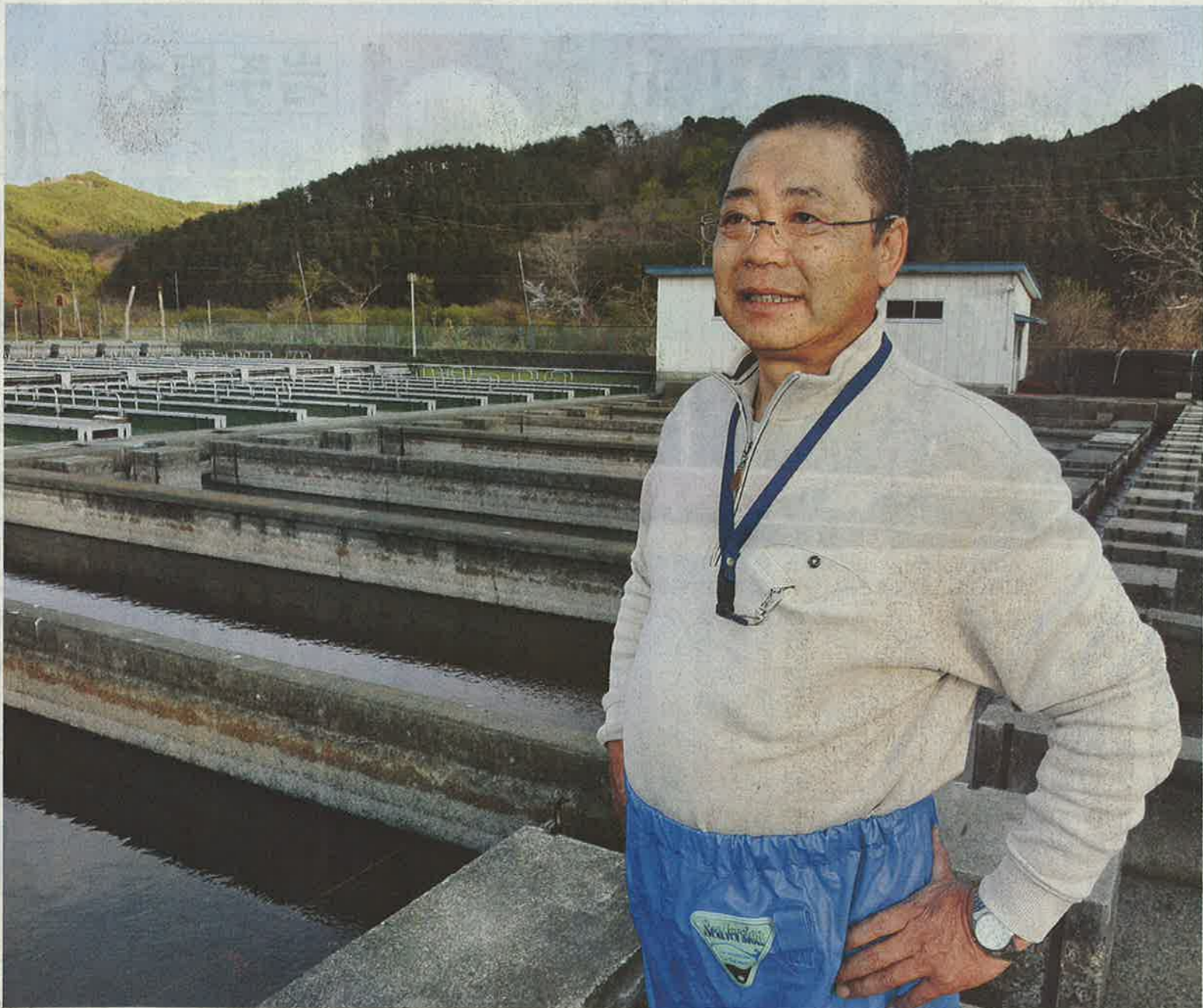
サケの資源は稚魚放流によって維持されているが、今回の震災で県内27河川にあるふ化場のうち、利用可能な施設は織笠川など9カ所だけとなった。放流の継続は今後左右する大きな課題だ。「他の漁協から依頼があるかもしれない」と忙しくなることを覚悟する。

野田村の下安家漁協を経て、1991年から三陸やまた漁協ふ化場に勤務する。万全を期すため9月から翌年4月の放流終了まで、ふ化場の2階に寝泊まりする。「漁業者を守らなければならぬ」という使命感からだ。

織笠川は80年代の県のサケ増殖計画で稚魚の海中飼育などに全国に先駆けて取り組んだ。近年は遡上するサケが減り、昨シーズンは1万8千匹にとどまった。「丈夫な稚魚を育てるためには、いい状態の親サケの確保が欠かせない」。今春は元気な稚魚を増やすと、湾内で音を使って稚魚を集め餌を与える実験を行う予定だった。

「大地震に大津波、こんな経験は初めてだ。気になるとは山ほどあるが、サケは4年後も必ず戻ってくる」。前向きに考えようと思機一転、頭髪を丸刈りにした。

(文・谷藤典男、写真・藤田和明)



「サケ事業再興のためにも、稚魚には苦難を乗り越え戻ってきてほしい」と話す橋場明彦さん＝山田町織笠の織笠川さけ人工ふ化場